俊寛嶋物語 貳

へ13
3140
2

駿河屋志七

俊寛僧都嶋物語巻之二

東都　平馬琴編次

第二套

抱皆留選とハ　牛若鞭前の事

和親相國入道清盛ハ。姫意山中の異変。しらず。西八條ハ引ゑ

さる。絆の為体。先〳〵ゆえ〳〵。ゆゑ。乳一門の輩。息頼呼房の

侍。ゆられもく〳〵と走り来る。三條河原より。黒谷の方へ馳ちがふ人

馬。駄〳〵ゑんどいふだらをす。ゆられども絆既

孤もすゐ也べ。平ハ相國入道の車を守護し。

ゑ山中を特さ〳〵。餘類の癖者や籠

鹿猿の外ゑハ。眼よめるものもゑ。樵夫只一人よ。羅彼妹定

ゑ。十四五人の兵をうしゑ入る。雪以不覺の

門 へ13 3140 巻 2
昭和九 九月十二日 購求

定原家の残黨なるどよとそめ〳〵めとそのあくして正親が首を瓶壺の中
より寄出。是彼よんちゝるよ。その中。平治の役よ。義朝都を落〳〵
とて。降人よ出るゝ。司あり〳〵。その首をえゝ。法然と涙ゝ流
是ゝん源家所従の兵士。鎌田二郎正清がよ。登門を郎正親
と呼れゝるゝめゝ。僕原ハ正清が家隷ゝり。正清待賢門の敗軍小。
義朝朝臣よ従ひゝ。尾張路へ没落ちゝ。この正親ハ。十五六歳ゝ
ゝるを。近ゝるゝ所縁のゝよ残〳〵ゝたるが。今よゝゝ。雑色いう
ちゝど。且目尻よ黒ゝあり。是紛うべゝもめゝねその人ゝゝ。抑正親幼
稚ゝり。膂力人よ勝よ好ゝ。相撲柔術の勝負を試るよゝその右よ
出る童ゝ。大人とめゝども。侮ゝゝ〳〵ゝ。ゝゝば〳〵ゝ十三四歳よ及
ゝ。竹節を拉鹿角を撃ゝ。その力量ゝゝ。

ゝ。牛長のゝち。ちひゝゝゝゝ。父正清も右を振ひゝゝ。
千引の石をよ鞠ゝんど摶をゝ。彼処の高峯ゝゝ投下ゝゝ。
ゝゝれども相国をゝ。神も衛佛も助めゝゝゝ。彼ゝゝよ脱れゝゝ。
運めゝゝ。生ゝるゝれと一五一十を物ゝゝれバ衆皆ゝめそゝゝ。
清がゝゝゝ。難波妹尾が命を落ゝゝゝゝゝゝゝ。この癖者
をとり逃ゝゝゝゝゝ。宴よ入道殿ハ。ゝゝ黨をゝゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。緑由をゝゝゝ。清盛
ゝゝゝ。眉を顰。その正親一個の所為ゝゝゝ。今都ゝゝ。
頼政行綱あり。土佐ゝゝ冠者希義あり。伊豆ゝ兵衛佐頼朝あり。鞍
馬ゝ法那王あり。ゝゝ源氏の家中ゝ。努ゝ油断ゝゝゝゝ。と仰せく
ゝて正親が首を三條河原ゝゝ梟させゝゝゝゝ本人を。穿鑿ゝゝ

ゐるを見て驚き。案下某生再説俊寛僧都いその日妻子をおそれ鹿谷の山荘に赴くに。平相國如意の龍見に出るのとく。里人ホ罵あひく。えさらぬ径に。道をうちぐく。北白河より山中越に指ゐく。桃谷石野戸の山間を径く。ゆく山荘に到るとぬ。ゐるゐる蛾王ハ今如奴隷に扛擔し。先ゐらく半ゐる長櫃の末さひしくぶ。ふく詩。主の俊寛ようくとまうせば。俊寛ゆのく。彼ホ相國の龍ゑを恐れば。如意越えを登り来く。遠く抑尚せられ。ちひの外に逗留するめ。欲事に辮る奴隷の常。うち捨くあけ色とりへその言語いまざ。ゆく行くぞ。如此如意山のうと騒しく。貝孤の音響に響人声遥に使ゑ。ゐしく。主後耳を側つ。これを怪く。一人物熟くとる支卒に。猩の容をゑたく。ゐれとく。岩尾山のうえ遺くうり且くしたその人走り来

てまうんぞう。僕如意山と岩尾山の間に。薪樵る翁に問ひえる。ゆく猩の廷を問に翁答く。志賀の樵夫に。澄門とうるゐの平相國を狙ゐんとく。如意山の巓うり。磐石を投懸立ゆに牛も車も。うち砕くひぶ相國いかるゐりやとく。副車に乗ゐひ。うぶれ躬に恙ず。彼澄門ハ脱ゐに道のくて。鞍の兵と血戰ハ妹尾難波とゆうんひの六彼羅武士と相鬩て。籠のほうりに仕れしうり。さくかの澄門ハ源家の兵士篠田正清が呼ぶに。万夫不當の剛者ゐりとゐるのゐりてまうち。径に。ゐのほ本人の躾居るとものやとて。鞍の武士貝孤を鳴らし。関声を揚。狩さぐゐとぐ。されば翁も物の凄ぐくてぴのハ後に隠るゐ必しも。麓のうくるゐりゐひぞ。捕らまこゐ。ちひもかけれ儒衣に。可惜命をうゐるべれ。とひ果に足ぐや

に別れさりしかバ。軈て立せ給ひしとつぶやくがごとく物がたれバ俊寛ハ
いと本意なげに。法師天窓を掻拵て。嗚呼彼澄門とやらん蒼海
なが勇ありて忘れがたしかるに。身をしづむること惜けれ。尚彼く
巌に打れて。醢となりぬるにぞ。成親卿の宿望ハ労せずして畢し
あなべし。さりとも予が住せしハ人の命運なりと意の中に嗟嘆
して。すはそのうらみを晴んとする折から。長柄を扛擔る奴隷ども
額の色ハ夏山の梢より猶青くなりて。やゝ前にすゝみ着。俊寛が
端ちかく出るをみて。柄を楷折戸の内に扛おろしてその手を
を窺へバ。蛾王待うけて。近く寄よし。汝達中途に抑留せられ
よるハ。平相国の瀧みに出あひぬる故ならずや。相国を轢んとする
癖者が為に。俤ハ面あらそひてけるならんといへるなりけん。げにもほしとのあたり
え松の前も其徳の容をみて。なりとなりけれバ鶴の前徳寿丸
とも安良子をわすく。綾障子のあはひさゝからす立出奴隷ホがりうく
家をまくの件のめぐれバ流る汗をうち拭ひ。さてハやと縁由を
待ちやありけん。ちからよりえず此ことはり箇様にてまそゆへおち
もなく物くるゝを。俊寛つくづくと見て。蛾王彼此をみて。彼ホいかなる
遠り来る子神妙なり。其旧の処に躁居て。武士どもに怪しめられ
なバひとども頓に放をべからず。さらバ其崇からくへに係り
て。いとおそげくある人ハ臆病なのもかゝる時まさに物の用に立
なれども笑ひとくし柄を免して。調度を取よと御せる小蛾王意
を得て。長柄を縁頬に扛よせさし。忙しく杣の棒を引抜くやをら
蓋を反退れバ。思ひもかけず美少年。内より肉ぞと跳出て縁の上に

牛若圖

鹿谷の山莊に到る

去ぬんらう入道

あり天

うしわか丸

ぞ立さりける。それ牛若なり。その折拾。鐵漆墨よ薄化粧して。唐織の狩衣よ。精好の大口を張らせ。虎の皮の尻鞘たく。金作りの太刀を佩き。気揚くたく。些とも騒がどいと落閑く艶るくとて。京上蔭よくちゃ優れと。眼中睜くくて清くと秋水のごく。怒を含くく冷視る顔色。威あれども猛くくど神の人のとちひきつの風情あるよ。俊寛主従あれいるのと呆き果て迭よりあをたくど。安か蛾王い奴隷ホよ対ひ。洪逆臣よめひて延滞ていい理あるよ仰られどいのたよこの少年を早めくまれる。縁故をたしいへさくも怪有ある白徒どもるみと苦り切て寡れば。奴隷ホを当惑面よあくられくひとくよ言詰もあく。既をつれ拔て陳るあう。吾仏全く柩の中よ。人あるたをとくとどいたれ。柩の背よ捨ゆれく。籠の背よ躾ひ。人音を早りと退くよ遑あく。木のよ捨ゆれく。籠の背よ躾ひ。人音静ひよりく。舊の処へ入てくたくよ。誰とかたくど。柩よさくる擔棒を引拔くひひ。がど忙くれば。矢庭よ柱をさくへれつたくよ杠りくくあくるど。今くくさくへば少年が。柩の内へ潜び入るとど。柱を引拔ひくをひくぶりたくど戦度くれ。彼人よ向あくば。綽めばくる分ゆよひんと回答けり。俊寛とれをばくたくたくぶ。ひくり左右つ少年よ対ひ向よ縁田正青が児よ。澄門行ば。平相国を縛めんとくく。本意をえくとど。怨池珠さくれくくどたくるよ少年。この柩よ躾あくも。彼山くるよ。時則もくるで。澄門をくくひくる本人よ究ちり。察ちくくく。源家の仇曹司よくくを在とどくれ。おくのあく法勝寺の執行俊寛と。名告ゆく。六波羅へ引て立れて。入道どの仇感

より頭ゆらんいうよざふと結向い牛若莞爾とうち笑ひ。推察より遠ど。
この長槍の内より躍出ち。ちぐ〳〵敵の英気を挫くるい再ち卒意を逐
ひ。卒然数百の兵士さへ屑ともせりわれりのを。生法師の分際より。
搦捕んとい舌長。これこの山荘の気運をうめひうんるよ。殺気肉より
満ち。事を謀る閑室より。執行も又隠謀の企ありやいと洩し。と宣へば。
俊寛はもめへど大よ驚ひ且その聰察睿悟より感伏し。にを俯く居
たりしが。忽地ちとうち笑ひ少年その身の縛を脱んがよ。根より云
なひひめいそ。これい是生ぜ。いちぐ隠謀の企あるべし。前のごくいひ
ちく。一時の戯とのみ。獨戸も窮鳥を捕らど。猛虎い伏肉を食い
ど。慈悲い如来の本願なり。ちく源氏のい曹司より在するとも。なぐ
りも悪意のよあらぐ。ぞほぼ。ぱえ。ちわ。ちべ。ちよ。ちん。ど。

らいと猛進ち。蛾王客房へ案内ち。曾待ちわ。せ。ちと。ち。ち。
ぱぐ〳〵いあれど。蛾王いちぐ。如謙ホより。長櫃を背脱のうち帰へ。
聽ち牛若を誘引ち。廊をうち続ち西くより。私の前い。陰の前
ちもより。ちの隙ちりられを目送ち。ちも藤蘭ち安寧ち。女より
ちもちんちほりれ。如児ちちる。ちひぐより。ちる醤をもちちち臣
ちい。さちる喜〳〵ちめ。といいちけち。陰の前をえちるより。陰のあ
い顔ちち殺めち。如の後方より立ちられ。ちて俊寛い安良ちち
仰ち。雀鴉の偏提をひちち〳〵。ちぐち孟を率ち御曹司より出ちめ。
四妻八妾の結の序より。扇笏より。ちち〳〵ちけるい。ゆ倉卒ち中條
ちい。ゆへど君ち面影のち〳〵義朝新臣より背ち在ちれば。彼左典厩
朝の遺腹子。鞍馬の牛若丸ちんちい晴〳〵たり。俊寛安〳〵ちり。

ところを象數に飽し。瑜伽三密の行者なりといへども。村上源氏の嫡
流なり。祖父雅俊卿のむかしさま。猛かりつるよしは世の人のしることなるに
頼しくおもひなん身にかえても含藏進らすべしと信ぜられていふ。
その言語およそいんぎんなりしが。牛若うち点頭てこゝろをうちへ運り
しかし。義朝が季子なる。牛若と呼れしわれこそかうはまうすなり。母の御よ
ろしく。七才より鞍馬に登山し。東光坊の弟子となりて。今の
名は遮那王とぞいふなる。むかしわが清盛入道は與に天を戴かざる
讐なれば。いかにもして怨を報ひ。父祖の孝養に供んと夙に夜
にわすれ忘る隙もなく。近日鞍馬を窃出奥州へ下るべくその用
意なしたるが。單身にその道のほどを便なかりければ。如意山中に
かけ入りてしばしの外に日を過すこと、ひさしからんども。譜代の家隷登門
太郎正親といふものに名告あひ。如意の瀧見を幸に。清盛を狙
撃んとせしにその事果さず。正親をさへ討せ辛じて賊の蔽を
殺脱ぐに再生の恩恵を稟るに。過世いかなる契やありけん源家
舊恩の侍も平家に媚を求るいまの人のこゝろなるに。執行まで
すせる舊識にもあらざるを斯く懇切にものし給ふといふ
ねれば。回答なへば俊寛満面に笑を含み。酒をすゝめ殺を添よ
とく傷は何りつる蛟王安良子を退しさて膝をすゝめ声を密し
是曹司愚僧をしるや。舊識なりといふは宜ひそ。父仁和寺の
寛雅法印と君が祖父為義朝臣とは。師檀の契ありしかば。かの
とよれかくもあれ。さらぐと奥州へ下りなんより。この山荘
在家を隔ければ。世を遁ぶに究竟の地なり。いかなるものゝに坐

ちよ。愚僧は一人の女児あり。名を鶴の子と呼びて。十四歳なり
ね。孔子の質なり。詠雪の才を〳〵といへども。ろろ〳〵繞書の業
なるべし。〳〵梵女児ありを嫌ひ。君が子を其帰を執
ら〳〵。ぐ〳〵播揚の好を絆びるん。聽ぬ〳〵とのよ。牛若回答た
ちまち。強縛の中より父を喪ひ。久〳〵朝敵の餘類と係て。
落魄ることの分なる妻を擇ん処なり。ろろを僧都嚴愛の息
女をもとめ。妻ちゝれんなりちよりの。僥倖なり。さらいへ。一日の安
居をなりの。僧都親ゑを係累さもるなもあらび息を仇
めく報ゆ。そも平氏をうら滅さんとぞひらもわるその日よ
り。命運を天に任せ一処不住の牛若。いづ婚縁を結んで。
ちいちもかけどもと懇辞ゆへ。食寝寛慢ちゝ
聊も妨なり。近曾安相成親卿。ひひ企ゆをあり〳〵。同意の堂
をり〳〵ちの山荘に會合と。俊寛主丞成親卿と師擅の契ある
ゆゑとの隠謀ゆめ〳〵れ。肺肝を摧といへども。せん漏そんを
を憚ゆ〳〵。妻なゆ〳〵さ〳〵し。腹心の家隷。亀王蛾王ホよも。いろ〳〵
ち〳〵ひび。是私の宿意のゆゑ〳〵。後白河の上皇も。内〳〵御同
意あり。夫萬卒いはゆゑ。一將いはゆゑ。曹司〳〵。父祖の怨
を報んとの〳〵成親卿を輔〳〵。平家を一時に拉ぐ。針略をめ
ぐ〳〵しゆへ。愚僧密に彼卿にはしそめんゆ。重く用ひゆ
べ。天運循環ち〳〵。平氏ゆのぐ首を授るゆ。忠義ゆ
全〳〵ゆのよ〳〵ぐとひものへど。臂ぐゆる銀の龍ゆを
まと嗣〳〵勝に押付にわら彫〳〵捨ちる。牛若これを翫し。

仰寔ふらけのうりぬ。そも同意の輩い雖くるりや。と問ひ給へば。俊寛右手
の指を傳めよりゐ卿より。成親卿の嫡男。丹波少将成経。近江中将の
道蓮阿。武士より。摩田藏人行綱。ら。これを今度の大謀軍とぞ。その外
平判官康頼。左衛門入道西光。ら。北面西面の輩より至て。色奉
より。追めゝど。ゑる金石の志傳ゆ。とりとりより告よりけるば。牛
若守果て。嘆息ゝ。宮の不ゆめ。行綱い源氏の支流
より仰げゐ。その性危忽ゆ。謀寡ゝ。られを大謀と憑めゆ。不
覺の至りゝ。且康頼の狡薄より。て妻孥ゐる西光ら才ゆ。と時を
得ぐ。ゐる。所謂餐上の蠅井底の蛙ゝ。加之。貴世の亂ゆを。
ゝ。緣起を察ゝ。成親卿ゐ。ゝ。の大謀ゝを。

遂んとゝ。ゆゝるべ。ゆゝゝ。世の乱。者の為ゆ。ゝ。貴禁。名の
軍を起ゝ。平家の鋒より。向ゝ。卵。石を。ぐ。彼。精衛。
鳥の木石を銜ゝ。大海を。埋ん。遂より。弱。
愚ゆ。不知ゐ。人妻。天より勝。天定ゝ。人より勝。
申包胥が金言ゝ。平家。より高位より居ゝ。天ゝを挾ゝ。所。妻
ゝ。ゝ。人妻ゝ。天より勝ゆゝ。真ゝ。ゝ。起ゝ。成親卿の不覺
ゝ。倫ゝ。より足ゝ。執行。今。の隱謀より。行擔ゝ。元凶の輩。
を。組。額。を。合。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。を。耽ゝ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
より。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。成敗。を。拒。明。より。禁。ゆ。ゝ。俊
寛。頻より。感。嘆ゝ。大息。吻ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。曹司の。殘。論。寔。
ゝ。愚。僧。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

其親卿は蹇終の恵を稟て、ようやく水火も辞ぜず契りを結ぶ。好もうちうちこそ。今度の隠謀は、あらぬ事の出来を、今さらに思ひ離れがたし。絆なるらんに、ろくろくは死んのみ。曹司、ようやく橋梁の信を憐れみ、夫婦の情を兼ねぬ。憑むの殿原妻子ある中は、天の生せる大和軍君が右よりの出るものなり。さればこそ、終は平家を滅し、会稽の恥を雪めたまふらんぞ。眼を東門に懸けて、今面のあらんずるがごとし。やるせなき縁を締ぶ。女児が久後、いかにせんと、縦俊寛が法師首はしるとも、妻や孩児もいかにせんと、ひげて領落あれうと、涙を流しつつ、元は現ぬ。のちは蛾王安良まで、紙障のとなりに寄ぬ。ちぢめて俊寛が成親をの隠謀は、夫婦面をあらつらつら愛をもて内よりぞ。

を執る。俊寛は安良まで仰せく。松のあとよりの子どもは、ひとりらつ。さて牛若丸は別して、彼は荊婦松の子、女児は前の孩児徳寿丸なり。その縁りあるとて、牛若は席を攘ぎ、忘れぬ歎を訴へ、ぜひ学えぬべし。俊寛又松の子は、ひとの君は左馬頭義朝卿の末なるとて、牛若をと思れ。鞍る山にて生育たるひとるが、此度猛きひとりとて、陸奥へ下りぬとぞ。半日の閑談は、捨ぐるとも、ひをなすとて、宿縁の係るところなるべしとて、婚ぐ。ものとなるなれば、敬びぬべし。殺のおもさを喜しかるべけ也。ひとり食べて、学えたらもれば、鶴の子は、恥しびよさ、病に臨む秋をうらさみ。たくさん、ほとき風情あり。松の前もちち咲て、那商ぞ。年は十四は、ばれども、ものとあらるく、仮くて、酒の上童を、婚よとう

俊寛僧都
成経
康頼
しゅんらん
俊寛僧都
成経
康頼

まるる。親ゝが面目なうへいある。れ曹司陸奥へわりのひとりの比まう
ゝ。なり本ちきんらうぬ東路へ張ぐちのうんらう。なのぐくいとよ世とよめ
ゝ。ぐあ仏それよ似ゝ行れども。執行の平家よも痛らどろづ憑ゝ
人よ行れがめ〳〵計ひ行ゝ。と信ゆうよひ慰めゝ。官符そあよは場
ゝ。蛭王安良ゝもられ婿君を招めひとひと愛ゝと祝ゝうんを。
牛若いぢうけとつと縁頼よ立山簪ゝよ近れ青梅のたゝある一枝を
小さかを抜とゝと伐られを携ゝ。驚の処へ立帰ゝる。主夫婦が間よ
ゝうあれ。青梅よ酒を煮ゝ。英雄を論ゝたる。震旦三国の故実さへ
どひ生ゝれ。今ゝあれ劉備ゝあれもめゝねど。荊楚よ身をおゆ。呉ゝう
拝びと。妻をゝさゝよたる頼いゝ。情愚よめゝゝ。壁言ゝとの梅の柄のど
ゝ。斧よめゝゝれい伐ゝを。ゝど楽ゝ。夫婦へ人

倫ゝう。えめへゝとの梅も。冬ゝう食て春花され。今ゆゝよゝを締ぶ
牛若い舎のゝ。雨もそゝいで夜めゝしよ。散も果ゝが結ゝて。妹夫の
縁ゝもゝめひゝる。この姪をゆゝうれめゝぐゝれ奥別へ赴れゝ。三
年が梅ゝよりまゝつべ。呂その時を待めへと。梅よ譬ゝ名ねの
稚枝い殊よ色秀ゝり。俊寛ほとゝ感嘆ゝ。大丈夫の一言い。恥ると
ひへども追ひゝど。実ゝの不倫ゝゝ。二年い勿論五年も。十年の後も
まゝべれが。紀念の一種を送ゝもれて。安児が心を慰ゝうれとも
ゝうめへと。呂管よ乞求ゝゝ。牛若九己天仏ど。墨本の筆のゝ
ゝれを抜ゝゝて。ゝる扇をゝひゝれ。

色も香も春を契ゝる梅が枝よ締べる実さへもくせありけん

と書ゝ。梅が枝よ結べさげゝ山ゝめへ。俊寛ゝらへゝ。

吟じ果て大に歓びられを松の前に遍く与へしが松の前も世に嬉
ばしれ気色なく。頓て鶴のおよもしせたり。時に俊寛心を立
てまづかの袋戸の内より。錦の嚢に納めたりける。笛一管をとりいだし
うやうやしく右手に捧もちて。牛若丸にむかひていふやう。此の笛は白河院殊に
まれ寵愛ましくて。小枝と号をひくをきこゆ。祖父京極の亜相雅俊
にあたり。今俊寛に至るまで。三代相伝の重宝なれど。絆のよろこ
びしさは曹司に進らせべし。君なくとも稚くおはせん。小枝の
笛を横が枝の詠歌に擬る習引出せ代を寿く州は由笛といふ
字も名詮自性。納めへとさし出せば。牛若これを。左右の手に受
て押戴き柯亭蝉折にも劣らざる。右院恩賜の名笛をたまはる
る。歓びられはやんめのし[illegible]

陸奥へ携ふべし。実に憂ろうざる宛をうけて。謝するに遑なり
と宣ふに。俊寛理なれば笛は君奥州へ下りたまふならし
保侶に。附托して進らせうん。三条の商人に。吉次信隆といふ豪
家あり。他毎年に陸奥へ下る金商人なれば。秀衡が館へ伺候を
とげられが年来案内の者なり。且予が幸に信隆と師檀
の契あり。さるによりて。此のの彼男京極へ指来て。あまその例の
東下りしそるまでが。自の暇をもうしまんためにきたれりといひし。
おりかに彼が起行は豈の料になんなるべし。これ今一言をよせて
憑ませるが。頼く頼もしといふべしと。鉾詳に説きさとして蟻王をよびむかう。
みなのびすみに曹司のおんとも供して。三条に赴きて吉次信隆に對面
して箇様ぞをよりいひしらべ。とく立帰りて返命をまうせよとありけれも

今宵は京極へゆくべし。とうとうはなをまつべしぞ。とうとうそのころをはさ。絆既より悲しひぬ。わくと牛若は。俊寛夫婦の好意を感じ。はえん。鶴の前徳壽丸より別を告げ。その夕られよ。蛾王より御道さしてく吉次が宿所へ却たゆへば。俊寛親子別を惜む。彼此よりつたみのひうぶ。吉次が下向より飛と音。耗字せぬ。とのだうよえもいらね。女房より代る姑の愛〳〵しさ。曹司も。再會を契つ。松明ありてら。白蛾王が。後より跟て。出さへば。俊寛は諸れ戸のほとりより立出て。木がらゝゆで目送れど。影とめあくね莫の水より。小鮒とぶて水下間。松明の光も山路の露より。滅て迹なくなりぬ。

第四套

抱新枝然とは　僧都が妻子の事

（細を脱る輪より吻く）

（山荘の夜初更の花明より荒しく敵）

（成る奴隷。雅と図ぶ。その人誉く。成親卿より密旨のあん使なり。此より執行）

（こゝの中とうとうとりの夜い寂莫なる山荘の母屋の間も遠くれば。俊寛とゆくも）

声をあげはとこの呀。とひとりとら。連忙〳〵安良より紙燭を乗じて。

出居の両戸繰あけさして。姉ちゝ出ぢて使者をほび入るより輪夫

鞋奴五七人。先より簀尖をふもてして。一挺の轎をこの内へ卑のれひとりの

主侍。縁のほとりより出をうり。砌の板よりもをもたて。俊寛よりうとをゆう。

主君成親。今夕戦より會合をやあるべ不。僧都京極まへ五さべ。この山

荘へとうけあり。夜中なれども。ゆん迎とうく。大納言平朝臣官中ねの

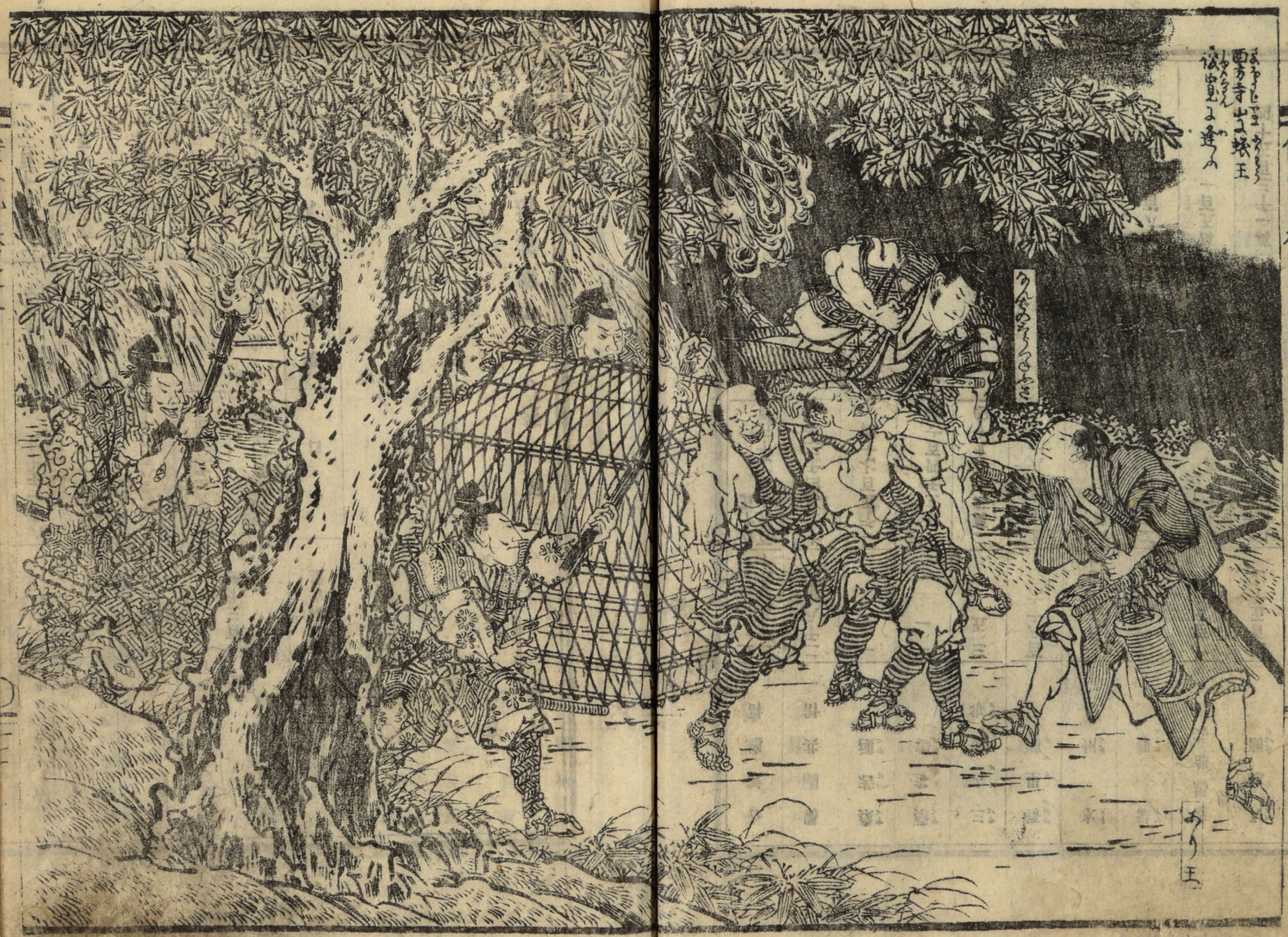
さこゝのしどいとくよりこせゆひろん。卑〳〵もれる轎もゆへば只そがきくく

ゆん出ゆくりといふ。俊寛ゆく眉根を合せ。亞相の仰敬よ。今夜會合

あるうゝ。はも及ざりしよこの処へ迎の人を来さるゝゆべと出りしは。

淵達見く休足せよといひくハく内に立てハいり。松の前ハ緯の絲をつ
らんとし。法衣ハ絹ひつゝゐんとするを松の前ハ夫の袖を引留。小夜と
いひ山路といひ彼方の人のさまをみそれおぼつかなく。詐りわかく蟻王ハ少ぎ
恥かしげくおもふも世の事よりも一人二人の従者ハおそく出かへりしやうすん
胸さへうちさらぐ。ゆふかたよおもむくいへどもゆくもむひらくへ。今宵ハ由ろ
ぞうちあれりど。姥がさしてそる妹夫の別れ。これを限りとおもへねども。
鶴のおも妾見子も言語を謝りて留まれ俊寛卿をうち捨てるな
ちるとをやいまくだ四十によまるハなかなかぞも人に恐しと傍らハいふねあの
を迎の轎さへ来されしをゆるさんハ不礼と。山荘の夜の衛もいよく
怒よたぐし縦物の用よ立ざる奴原もとも一人も残く残しおかんとて
が心ハ安かるべうれ。蟻王がみあげとのたまひをひきしもよ安

雄々しくれものと思ひつくらゆるかるらくとも人に留るハなにもかくともよりと其の処致させけりと
怠慢て。法衣の袖をもち拂ひつと立て緑頬に立るを逢しと撞なおす轎の
戸を引開き主待よ會釈して内ハと乗せ。あるめろ肩入れ飛が如くよ
早くゆくさるれよ蟻王ハ三條なる吉次が家に牛若丸を送りとげ。
西ヶ谷寺山の麓をゆりかれハ廿一日の月朧。山の挟よさし昇て山杜鵑の
鳴音よ深く。時しもあれ向ひより人数蕉火をとぼしつれ。誰ならんと
見る。青摺袴なる轎よ杖家ならと山路挟しとのこう。蟻王ハこれを
みて心ある悲態や。ゆかる罪を似さりんとりくへ地獄も極楽もひとつよ
ありけりとひとりごち筑弾しつ行ちがふに大老よそれとなりの轎
の内なるおぼしく。世よ蟻王と呼ふゑもゆかりのへくもあらね俊寛なり
これをもひとくすで胸うちさなぎ走りくらんとす。蟻王ハそ狼藉せよ待


西方寺山之蛭王
法覺と達の
うんぬめたろうさぶさき
あり王

退る。脇添の武士声をあらしを。六波羅へ召さるゝ囚人法勝寺の執行と
ありて。ありとあらゆるを召ぐ。物ども這奴を脱しなさせと刀の鞘
まをかれば。蛾王ゆるゝ些とも憶ちず。仰うけあらひねたれども。
俊寛行方の罪あり。妻あるぞよ。ありねを。猛よ召龍あり。
殘者の中言ふ。濡衣を被ちゝるとあり。といへもめへと件の武士蛾
王を信とあるへらん。漫ありり。罪ありたるものを縛むべ敬。今度年親を
の謀叛なり。世を乱さんと計疑る。俊寛康頼。蓮行西光なんどがあり
の乃倅を告ぎるものあるよりて。禁獄ちらるゝ。ゆゝしい難波二郎
経遠が才。三郎経房。入道相國の仰を稟。京極の宿処へくを向つる。
俊寛い妻なるを引ゝ。鹿谷の山荘よりとゆえーぶり。支の裝束
ゝを気暁ち。逐電するとゆゝと。遠慮をめぐし。年親ゝの使者と稱

しゝ。ゆゝく従引ゝ。主を喪ふ疲大ども。妨ちが同罪ありゝん不覚ゆ
しゝく後悔ちゝ。いたゆゝ。ゝ罵をけり。蛾王さそ。ゝを足が寛ゝ
罪科脱ぎゝくこゝをゆへ。但主の禁獄ちゝをえつ。防容ゝゝ。
家隷ゝゝもゆゝ。法師の野従ち。をか一嬰ゆ。試をゆへと。
ゆゝ。木を。棒殺べゝ立塞ぎゝ。難波二郎大よ怒ゝ。ゝ癖者ど。搦捕
ゆゝと難兵ども。年料ゝとゝり。差しゝ。その勇気ゆゝ恐れゝ
ゝとゆもゆゝらゝど。俊寛ゆ橋の物見ゝりゝ。ゆ景迹をえ
ゝれ蛾王。泳麗忽の挙動ゝ。ゝ主を。ゝ年親ゝを。ゝ主
ゝ。ゝ。ゝを抱ゝ。ゝを。ゝ湯をゝ。ゝ沸をゝ。ゝゆ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ。一旦ゝを脱ゝゝゝ。年氣の威光ゝ。捜
ゝゝゝゝゝゝ。ゝ宿ゆゝゝゝ。泳ゝ。ゝ義をゝゝ。松の前ゝ

子どもらが先途をせんと見えけ。世にいはれたる足弱が杖とたのむ
いかばかりかれも嬉しくおもふべし。狼狽ながらも一言の咽に迫られて蟻王は噫と
ありし勇気も挫き撲地と坐し。男泣にぞ泣にける。難波三郎はさし覗き
呵々と冷笑ひ。かゝる白徒にかゝづらひて可惜時刻をうつしたり。いで雑兵共
さらそ待うびのかうんかの道塞やと丁と蹴る。主を見すてゝ雑兵ら
も亡瑞乱して蟻王が肩尖項の爆ひなし。数回踏まれて吐と笑ひ
鋼轎の後方先方に立つどひ。列を正して走去ぬ。かゝる難波三郎
経房は正と旨ありて物遠しかる兵二三人に謀を密授て途より
かへし蟻王がゆくべき方を窺するともなきもので思はず身を起し。
蹴られしが身は爽にて。主の難義に胸を痛め御を悼くに
されども。跡目につけて六波羅まで見えがくれになん供をぞしける。

ひとまづ何方もしらで在ある。夫人孺君のうへもおぼつかなし。とやかくや
と思ひとらへるにつけて行もえかりがたるるに。折しも片田の雁な
らで峯越かびし風情なく。ぱらゆくに思ひ定めぬ。忽ち裳をさい
て鹿谷へと走行る。夏の夜なれば短くて遠寺の鐘の数聞ゆや丑三に
なりにけり。かゝる身に係る寂滅の声ときこえねど。窓の前は更ゆくまで
いも寝られねど。鶴の声めるともに安良子に源氏を読して蟻王が帰
るを今かくとまつ程に。蟻王は喘々山荘に走り着。門高やかに
敲きければ。宗徒を近て走り入り慌しく窓の前の方よりて。事
をかいつくりしかたれど。倍しは事親々の隠謀にこそしのびける
に陳既に昔顕難波経房付まとらけゆかれ。事執々の使者と称して
振く逃引ぬなり。轎に網を被蔽くに蓋しめ今さりりん兵士三四十人是

きこえけり巻六波羅へとく〱おもむき去ぬ某さりとも西方寺山のほとり
まで〱いきあひ奪ひかへしやらんと刀の鞘に手をかけ馳出んとす
の御黙止がたく立かへりけるを見て狐疑多き入道相国再び討手を向け
られなバいよ〱脱れがたからん天の明ざる間に便宜の地へ落しまゐらすべし安
良子も狼狽る裳にかゝげ下括の紐締るほどしもあらせずといひ果て又
忙しく納戸のかたへ立かへり路銀の準備などする間に案の前鶴の前は
これを見るよと泣叫びいとゞせんかたなかりしが假寐まで独寐の兎も
目をとざさり花を見らかくと途惑ひて母の袂に携着けれども
安良子も驚きし夏の夜の雨ならぬおのれが涙にて袖に杖ふと立さると
で立出かけぬ羽装ひならりそいそがれてつゞきける外にはなかけし當
下蜷王は納戸より立出そと安良子が来るとそれより人の音こゝにも憑
しげるしいひかひなきものともを倶しまゐらば却路次の妨なり置さるべき
て奴隷ホにあらるゝ越前国水江庄ハ我が故郷なれバ父黒居三郎ハ年
こそ老たれど手信するものなれバ彼処へ落しまゐらせバよそへもれ
に三國ハ法勝寺の所領なり。されバ人も眼を着まじ世に忍ばせ
に便よさを何地へかあらん伏さべしそのうちにおそありやと何が安良子
ながし身思しくつれが在処ハ寺とらふ山里にて。鞍馬より五里
おより北のかた。大悲山の麓に叉秦山四郎とそ縫しかれ母ハよろばり
信く〱ゆとこゝのもの人に行り。世を偲ひゐふれ深山にそ住よかしかし。
彼処へ落しまゐらせなへと耳語いらちふとるが宿なかりし人やあるがと
音さらね落人のなまなつかしき月影に笠かたむけて主従五人庭へ
閃ことをりしもあれ。蜷王が跡目につけて来りける難波が兵二三人樹

勇を奮て
蛾王山荘
小主を脱く

顔ちう跳て立かくあるべーとちられん。経房五侍を跟ひたされば。先ちう
ちゑ行と久し。推とも謀叛人の孩児徒寿丸女房女四人も罪人服ものど。
ちく縛めを受ちと呼ひ。庭ひよ立塞ちとめ〳〵しやと蛾王が走ち
ちてちく撲地と投退。又組着を胸前含て戻ちとる力量早抜弥が
ちへよ投ちて向よ跳ち足ぢちく。かくちとおりられちとちと力よ任
して踏みれば。安良ちとちちよ引留め這奴を殺さば。後日の妨足腰
ちとぢ追もけ。ぢ。繍めへといそがちぢ。ぢちと急ち是引の山路を西
へと先ちよ徒事を脅肩ちくちぢり日よ。胸さへ曇る安良ちが。安
ちぬ身もかひ〳〵く。左右よ主のちぢ抜て。ぢつちちく落ち
く。谷川のみや定めるれ人の往方をちぢちちよ。ちとちちとを良れるれ。

今意非親卿の隠謀。忽地よ露顕せち。縁故をたぢられば。麦田蔵人
行綱が同忠ちちて。彼行綱い六孫王経基の嫡子麦田満仲の長
男摂津守頼光朝臣五代の後裔麦田源蔵人頼盛嫡子
ちちく。左る頭頼綱嫡男の玄孫ちち。如れば源氏嫡ち名家のち孫
ちちとあて。非親ちも。就中〳〵ちられて。ちちく過ちの引出物
ちどつ。合戦のと。ちちづちち仕ちちと。択切よ報ちぢえて。その
歎ち地よ異ちちちち。ちちよ清盛入道。此意の麗見のおちち。澄
門を鼻正狩が狼藉い。必定本人あるべし。ぢ行綱が不ねよりちとて。
ちとちちちと。ちる人ちちれば。行綱大よ驚ち怖れ。当日ちるりの
もちりのへど入道相国の宿所へ推参し。成親ち謀叛の顛末一
味同意の姓名さへ。ちちもちく告ちぢ。ちちくよ追従〳〵て。逃るが

ぞくよりしらぶ。清盛聞て。且怒て。時を移さず成親卿父子以下の党を悉く搦捕て。西八條へ押籠られぬ。後白河院をうらみ恨奉る。不遜の挙動あり。しらぶ。嫡子重盛いとく練て。綸旨をうけ給りぬ。如て五月下旬に至て。罪藉既に定て。まづ西光父子の首を刎る。其親ども備前國に流つかる。難波とゝ知る処にて死所と定む。その他の輩に如意の儀あり。討死つる。難波二郎経遠が所領をもしらぶ。舎弟難波三郎経房。其釈をも預て。俤おとゝ向をもたゝ。ども清盛の憤を終に解ず。その年七月十日に。難波経房うけたまりて其釈をその首を刎。軀は俤子俤中の堺なる刑処に送捨しうるこれ当初清盛の需に。密の心明を俊寛に責て。

男丹波少将経平判官康頼法橋成経の執行俊寛の三人は薩摩の硫黄島に流さる。外の党も刑伐差あり。一人も漏るゝなし。剃へ支田藏人行綱は其釈を告げ知らせども最初より一味同意の筆類なり。罪科脱れ難し。安藝國へ配流されり。行綱は伊賀の為体。さて武士の所行なり。恒ざりのうつけ。

俊寛僧都の外伝

其元年其親隠謀の企を清盛入道に告示せり。仁安元年四月配流されぬ

却説案ずるに。鶴の前徒壽丸ともに安良子が親里寺谷なる案山四郎が家に寓居して。特場の野雞の雄を莫少へ柯に離れて養虫の父となりぬ。

髪ながくして。絶て。うつの日の長にまよひ暮て難。身は打鬢蟬のごとく。安乾うね袖を片布て。住つゝね宿は水を月も秋風にうつり。あるに安良子良子が出い哭のまと泣れて。牧生を業とせいるる雞産もられがの

されバ番ひしともしらず婦なる家ハ彼此とうつ〳〵。馬を峯山轎を扛く〳〵。
よび迎ふるよなん夫桑山四郎ハいづれ名を根次平と呼れ後夫なる
安良子がためにハ継父ぞ。彼を桑山四郎と混名するハ家の前なる瘦田の
畔にありよりかくまで云ふなる桑山子を立られて目標とせし狩に
里人の侍の夫婦を門田の桑山四郎。児と安の家ぞて耶と呼ひなせり。かくて
治承元年の夏安良子が給事せる法勝寺の執行罪ありて親族妻子
さへ蹇すに及び所従奉公の輩も皆四落八落に離散し。此瑁の蜂王のこ
忠義の志を稀すぞ。執行の奥方寨の前息女鶴の前二男陸奥丸を
扶掖安良子ともに聖ぐ脱出乎て帰男妨に縁由を告まゐらせし。
志ぞし舍ぎぬなられとも児のかいえ未だ信ある老女なれバ卿も推
辞気なく十二の春より安良子を給仕にまゐらせたる。八重葎繁れる山家の
巣ぐら鳥をつがひ子のごく憐みをしりて走れる物のたぐひだにさへ親の
あぶりんなつりて物のかひさまさへ絶る垢ハ脱ろとて擲家元の
内にもかゝりくハあらじとぞ思ふ。好男子のしのへせしをころ主持の恩愚
なり恩を稟て恩に答ざるハ獣に劣れり。貌こそ深山がくれの老木なれ。
ちろ元の洛人にやハ劣らじと思へども。山里なれバ栗の皮と楢の蚊やり火
あつでハ欺き待まゐらするものなし。それゆゑ厭ひあるぞハ。いかならむにても心よせ
よ。婆々が命のあらん程ハとにもかくにもして世をバ過さしむるならぞと
思ひくらし〳〵が。桑山四郎ハ恩も義も知ぬ大人ぞ。利をのみ好むが如くする。
嗚呼の身のなりければ。安良子が夫とても女性孺君三人すぐす。主の鉄く
てあきるをぞとらるさへハ思ひすゞる法勝寺ハ坊領許多ありて其の
高貴ハ世に知らる所之縦事にあふて其のあた処なくなりぬとか古河ハ

水も咽ず。彼主従が懐にハ。貯禄もありぬべしと思ふを慾の主にて
信しやうに皆待けり。かくて案の前親子ハ。案山四郎が家にかくれ躱まし。
樵夫炭焼ホが高やかにうち咄譚て往来するにも耳を側てきくに
俊寛僧都ハ。平家の相国の憎しとおぼせし人なれバ。三条河原にて斬
られたまひしとも云へ。又成経康頼ホハともに薩摩潟へ流されたまひしとも云ふ。
これをきくにぞいとゞ胸を冷しなげきかなしみのほかなかりけれど。かゝる山城のうち
にあれど山ざとなれバ。都の風聞も定かならず。あかしくらせる程
に六月のちかきに至りて。縡あらはれて落挙し。俊寛并成経康頼三人ハ。
硫黄嶋へ配流され。翌あさその所に出立と人ゞのいひ罵るを。そゞろに
赦免のみふところにかへるまでハ神仏にかけし祈るも仇となりし。案の前の
哀傷鶴の前徳寿丸の悲嘆。物にたとへていふべくもあらじ。三度の食も
咽ぶるにとゞで昼ハ終日夜ハ終夜臥てハ泣寐てハ卿のみを慕ふるも嬾く
痛しく見の手安良子ホも胸の塞をていとゞ悲かりしが蛾王ハ僧都の
配出ありし日。せめて途に出あひて面あるその形容をも見まく
ありし。御あとを慕もうけぬなり。定ひ遣さるゝよしもあらんべ
しとて。俄頃に京へ赴たれぬ。さるに赤蛾王が兄亀王ハ越前国に囲るゝ。
渡海が主に怒ひ情に引きへ帰ると忘れ主の要金二三百両を遣ひ
果しくひとり帰京をするほかに。左せん右せんと今さらに後悔して。
頻に思ひ惑ふ程に。成親卿の隠謀あらハれ。主の俊寛も其党類たる
によりて。硫黄嶋へ配流せらるゝと聞えしかバ。今まで植ある庭を
掃ものにも媚諂ひたる村長ホも。亀王をさえて罪人よりもなほ疎んじ
なやましぬ。結句謀叛人の餘類なりとて。宿貸ものもなくなりにけれ

び。亀王丸より発し給へ。渡海より京の経をゆえ[illegible]しく。[illegible]めいとう
あへど。孫を思ふ絆〳〵。内京せしより。侍所に当日より。西八條に禁獄ら
れ。京極の宿所。鹿谷山荘に外うう鎖〳〵と入れど。女性孺君の
行方。朱蛾王夫婦の在処。何地にも尋ねあぐんど。今問べんやうもあらど。
身の過ふ形ふれ。世より捨られ〳〵住なれ〳〵。旅のひわいもそれど。投く
やくべた方もなく。せめて主のすりあれあるやうをもえまり。腹かれ切ら
ばやと思ひ定めさまざまいひらへく。栗田口より宿をとる。絆の容をど窺ぬ。
因より。後深州院の御宇。正喜二年秋八月土辰の日。諏訪刑部左衛門
入道左衛門尉平俊職を率て。衛より伊具十郎を射殺し。絆発頭く。
刑部左衛門入道い首を切り。平俊職い流黄嶋より死さる。彼俊職い平判
官康頼が孫なり。且明友より〳〵〳〵られ。悲しみあれ伊具を切害し遂

より硫黄嶋へ流されく。所を親父と名るくも。悲むべく。亦冷泉院の
安元二年四月。帝久〳〵く物狂〳〵せ給ふ。西宮左大臣高明ス隠
謀の企ありく。橘敏延僧連茂田原千晴。多田満仲ゑんどを密より
集合。西宮殿の壻ゆく在ます。深殿式部卿親王を。位より昂ゆあら
ばと。計狡ゆ〳〵より。満仲同意ちのいどど。藤ゆく絆の類を奏ゆ[illegible]
られば。西宮殿以下の党より至るやうく。忽ち流罪せられる。義経記の説是と[illegible]異なるべし
かくて。満仲朝臣い回忠ゆもあるど。君のため自の為抜群の忠節と
いへべし。ちゆるより多田行綱い。満仲八代の末孫に。既より親卿の隠謀
より[illegible]。中ごろ[illegible]これを告げ。満仲と行綱とその越い相
似れども。その志い雲泥の差あり。亦悲〳〵しきかな。満仲と行綱と。

俊寛僧都嶋物語巻之二終

中山堂

雜錄 質 [illegible]